里地通信 7月号

発行：里地ネットワーク事務局　〒105-0003　東京都港区西新橋1-17-4西新橋ＹＫビル６階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559　FAX：03-3500-3841　e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp　ホームページ：　http://member.nifty.ne.jp/satochi/

会員事例紹介
草原と里山の管理・維持技術の実践と啓発による二次植生の保全

寄稿　高橋泰子さん
緑と水の連絡会議

■緑と水の連絡会議の紹介

緑と水の連絡会議は、平成４年、生協しまねの組合員を中心に結成された環境保護団体です。家庭環境に興味を持ち活動をするうちに、沢山の人との出会いを経て地域環境に目覚め、現在に至っています。活動テーマは「草原と里山の管理・維持技術の実践と啓発による二次植生（半自然植生）の保全」です。

大田市の主峰三瓶山に伝わる放牧技術や、かつて全国に島根「ボタン炭」として名をはせた炭焼きなど『生業』の掘り起こしによって、草原や里山に象徴される農村の自然そのものを、また、農林業の働きかけによって守られてきた動植物を保全するのがねらいです。会員は大田市を中心に主婦、農家、研究者など多士済々。

■活動の趣旨および目的

炭焼きなどの生業や、そうした人々の生活を通じて維持管理されていた里山は、労働力の不足の上に経済価値を失ない放棄され、水源涵養等環境保全面の役割を担うことができずにいます。また、江戸時代から続く和牛の放牧が創り上げた、美しい草原景観が認められて国立公園に編入された三瓶山も、畜産の減少により、その指定根拠を失いつつあります。そして、この里山や草原に生育する生物たちが、生活とのかかわりの中で生き長らえてきたことすら理解されずに、絶滅の道を歩んでいるのです。

平成８年、一時中断されていた三瓶山での放牧が復活し、緩やかではありますが、かつての草原がその輪郭をあらわすようになりました。生育に適した環境が喪失して行く中で、ひっそりと、しかし、逞しく命をつないできた「レンゲツツジ」や「オキナグサ」などの草原性の植物の増加が確認されるようになりました。このような生業による二次植生の保全の重要性に気がついた、放牧農家や林業家に代表される地元の方々との出会いがありました。そこで、放牧再開という歴史的事実の再現を目のあたりにした私たちは、草原や里山を、恩恵をこうむる都会の人々と地域住民との『コモンランド』として位置付けました。

そのふるさと景観の管理を考える上で、人々の生活と結びついた二次的自然の価値の理解を得ることが必要と判断し、これを実践・啓蒙していくことを目的にしています。

■活動の概要

会の活動を大きく分けると次のようになります。

１．地域に根ざした伝統的技術(放牧、採草、火入れ、炭焼き、土壌菌の活用、山地畜産)の掘り起こし、および啓蒙・実践。

２．草原・里山維持管理についてＮＧＯ同志の情報交換を密にしたネットワークの拡大。全国レベルのシンポジウム、サミットの開催と行政、学識経験者とのパートナーシップのもとのその継続。
３．炭焼き実践、炭焼き講習会、勉強会、講演会などの開催、草原インストラクター派遣、草原観察会などの実施により、市民・国民に広く「生業による保全」の重要性のアピール。環境冊子、パンフレットの制作、配布による啓蒙活動。
４．先進地例視察や研修などによる会員の意識向上。
５．生協等消費者団体に対する、炭など生産物の消費行動を喚起､および間接的な環境保全運動の提唱。
６．その他

■活動の紹介

次に近年の主な活動について、その背景にも触れながら、かいつまんで述べてみたいと思います。

①　４半世紀ぶりの放牧復活、三瓶山西の原での活動

島根県大田市の主峰三瓶山は、標高1126mの男三瓶をはじめ、女三瓶山など６つの山からなるトロイデ型火山です。ここには、江戸時代より和牛が放牧され、その絶え間ない食欲が丈の長い草の繁殖を抑え、牛の腹を通して発芽しやすくなったシバの種子が糞により広がり、かつては、山のてっぺんまでシバやネザサで覆われていました。この放牧景観の美しさゆえ、昭和38年には大山隠岐国立公園に編入されたのです（写真１）。当時は放牧だけでなく、農家の人達による採草、火入れなどの管理形態も組み合わさり、草原の維持と動植物の多様性を誇っていました。しかし、農業を取り巻く環境の変化で放牧は途絶え､次第に草原は荒廃、それにつれて三瓶山を特徴付ける動植物も姿を消してしまいました。

平成８年､草原の復元と畜産農家の生業を守るため、放牧が４半世紀振りに再開されました。長い間、ススキや潅木に埋もれた原野は、牛たちの『舌刈り』により光が入り、ゆっくりと、しかし、確実にかつての草原の生態系を取り戻し始めました。毒があるために、牛たちが食べずに残す「レンゲツツジ」や「オキナグサ」に代表される草原性の植物も、この数年で大きく育ち、また沢山の仲間を増やしています。

草原のような二次植生に対する理解を深め、その保全の意義を啓発するため講演会、そして、放牧牛との触れ合いの中でのインストラクター派遣制度・自然観察会など､さまざまな催しを行っています。なかでも、学校の遠足などの行事に合わせ、農家を中心とするインストラクターの派遣制度は、三瓶山の草原と成り立ちを、放牧牛との触れ合いの中で理解していただくのにもってこいのものです。動物園のない島根県では、動物と直接接触できるこの草原は、とても貴重な場所です。現在では、田舎といえども、生きた牛に触れるのは、生まれて初めての子供がほとんどで、広い放牧場には、子供達の歓声が一日中響き渡っています。インストラクターの話を聞いた子供達は、牛たちや農家の人達の営みが、草原景観とその中で息づく動植物を保全してくれていることを、確実に肌で感じ取ってくれています。（写真２）

1　国立公園編入時の三瓶山西の原(昭和30年代)

2　放牧牛とのふれ合い(草原インストラクター派遣)

草原管理には放牧だけではなく、火入れも重要な管理作業の一つです。放置されて火事の危険性が懸念されていた矢先の昭和63年に大きな山火事が発生したのをきっかけに、それまで途絶えていた火入れが大田市の手で復活しました。草原管理の市民参加を願う私たちは、行政に対する働きかけによって、平成８年より、県内外から募集したボランティアとともに火入れに参加出来るようになりました(写真３)。この、放牧とは異なる管理形態の違いによる生物の保全についても、前に述べた草原自然観察会、講演会、冊子などで紹介し、理解を深めていただいています。

こうした草原再生のうごき、そして、草原性植物の復活を目の当たりにし、人々の心の中には次第に、『草原の重要性』の思いが膨らんでいきました。

このような生業と復興による生きた草原再生例がなく、全国から注目を集めるようになりました。そして平成９年、「草原シンポジュウム97・第２回全国草原サミット」を大田市、三瓶牧野委員会とともに開催しました。この会には、29都道府県から行政関係者を始め、研究者、一般参加者などを含め、３日間で約1000人の方々においでいただき、その関心の高さに主催者側が圧倒される思いでした。

ここでは、サミット参加の首長とともに三瓶宣言を採択、第三回目の開催地に原生花園で名高い北海道の小清水町が名乗りをあげ、次回につなげる事が出来たことを喜んでいます。

草原サミットが終了し、ほっとしたのもつかの間、大田市は財政困難のため平成10年度は緊縮財政となり、火入れが出来なくなるとのことでした。全国に向けて草原の重要性を発信した、そのお膝元から火入れを中止したくはありませんでした。しかし、経費のほとんどが「輪地切り」と呼ばれる、防火帯の草刈りに費やされている事を知り、それさえ解決できれば、火入れの継続の可能性が見えてきました。

そこで、目をつけたのが別の放牧地で効果を上げている簡易式電気牧柵です。経費も大田市の予算の約半分と安く、耐久性もあることから早速購入することにしました。既製牧柵から10～30mの幅、長さ650mにこれを張り巡らし囲い、中にいれた放牧牛に草を食べさせ、輪地（モーモー輪地切りと命名）を完成させたのです（図１）。良いデーターが得られたことで、今年はさらに、長年放置されている登山道への放牧も、許可していただくことができました。防火帯以外の期間は、火入れなどのボランティアに参加していただいた農家を優先に貸し出し、山林遊休地の有効利用に役立ててもらっています。

その一例として、大田市には、市の花「レンゲツツジ」復活のために、数年前に幼苗約5000本を植栽したものの、その管理ができず、荒れるに任せていた場所があります。先の放牧地でのツツジの隆盛ぶりとモーモー輪地切りの成果を見て、昨年より放牧家畜の導入を取り入れました。牛たちは、人の手では難しい幼いツツジの苗を残し、その「舌」で周りを刈りこみ上手に管理してくれています。お陰で、地元でもレンゲツツジが市の花になった由縁を知らない人達も理解して下さるようになりました。また、この牛を貸し出して下さる農家にとっても、省力化、低コスト化の上に畜産物と言うメリットがあって喜んでいただいています。（写真４）

３　火消しにボランティアが活躍(中国新聞社提供)

４　牛の「舌」で管理される放牧地の「レンゲツツジ」

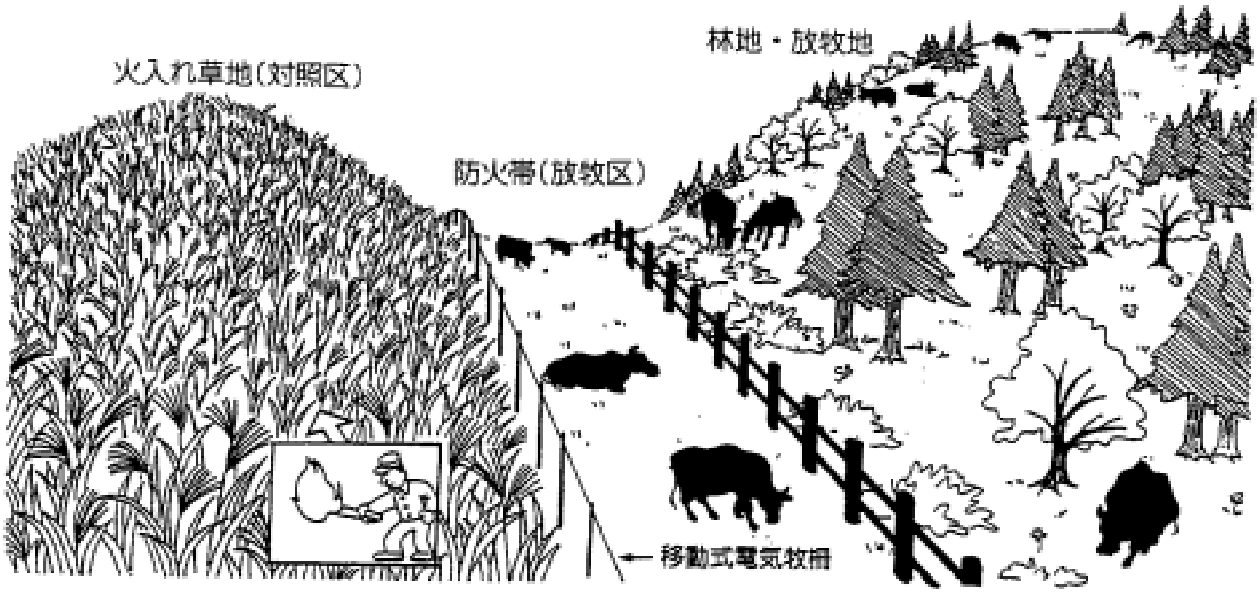
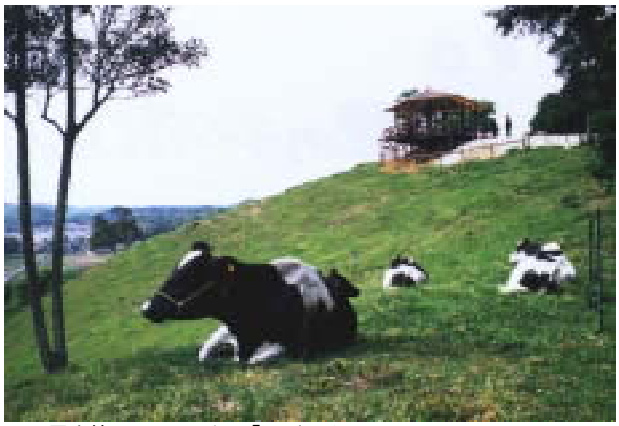


図１．和牛放牧による防火帯作りのイメージ図

５　大田市内炭窯マップ



６　里山管理のシンボル「あずまや」

②　里山管理の実践

島根県は、炭の一大生産地でした。私たちは炭焼きも里山管理の方法と考え、自らも８～10時間で出来る「縦置き式ドラム缶窯」{詳細は創森社：炭やき教本参照}による炭焼きを実践しながら、生産者と交流し、約２年の歳月をかけ炭窯マップを作成しました。（写真５）これらの活動に啓発された行政・生協とのパートナーシップのもと、県内での消費ルートを確立しました。消費者に対しては、地元の炭を購入することが、間接的な里山保全につながると啓発しています。また、行政に対しても、ことある毎に、防災設備品の中に炭を加えていただけるように提言していきたいと思います。

里山管理は本来、多様なものです。、その土地や風土、そして歴史に根ざした方法を見出し、里山を管理している農家を応援するのも大切な活動の一環です。その一つが民家のすぐ近くの急傾斜地に牛を放牧して管理する「山地畜産」と言う方法です。集約化の流れの中で、一見時代に逆行したかに見えるこの方法は、実は、モンスーン地帯の日本の実情に適し、なおかつ、環境にやさしい土地利用形態として次第に浸透して行くものと思われます。私たちは、この牛を使っての里

山管理を啓発するため、都市部との交流を重ねています。例えば、シバ植え等のボランティアに参加してもらって、自分たちが植えたシバの生育を気にとめていただき、地域の資源を大事にしながらの里山管理方法について、理解を深めてもらっています。

また、山地畜産実践農家中心の集まりである「里山放牧の会」と共同で、この牧場の頂上に、活動のシンボルとして「あずまや」を建てました。設計、木材提供、製材そして資金集めなどをボランティアの人達がかってでてくれました。そして、屋根の上には風見鶏ならぬ風見牛が取り付けられ、私たちの活動を見守ってくれています。（写真６）

■現在までの活動の波及効果と意義

日本の中で草原の減少は、農村崩壊の予兆でもあります。その草原維持活動を行政、研究者、農家、市民団体と連携して行うことは、とてもむずかしく、しかし、画期的なことです。私たちがフィールドとしている三瓶山西の原、50ha あまりの草原を維持しつづけることは、１万 ha を有する阿蘇、久住の大草原の将来を予測する上で重要です。狭い草原だからこそ管理しやすいと考え、農家の生業で管理している「生きた草原」として、地元の人々が誇りを持つようなものに出きれば良いと思います。

草原景観維持のために効果的だが、最も厄介な防火帯作りを放牧牛を使って行うことは、三瓶が放牧の先進地例であること、その草原が地域の財産である意識・誇りを地元住民が持つことにつながるでしょう。また、観光地での放牧が、牛を景観動物として見直ししていく上でも、意義はとても大きいと思われます。また、モーモー輪地切りで使用しない期間、農家に無料で貸し出しすることで広がりを持てば、個人の工夫のもと、山林遊休地を管理し、その上、放牧経験牛（緑の開拓牛）を作りだす事が可能になります。今後は、電気牧柵と緑の開拓牛とをセットで、未利用地や耕作放棄地の整備や保全のために貸し出し、国土保全のために賃金を払うシステム作りのお手伝いが出来れば良いと思っています

また、放牧を推進することで、シバに代表される日本在来の野草の自給飼料としての価値を見直しするとともに、地域の人達が、「三瓶山の本当の魅力とはなにか」を真剣に考えることにつながります。都市住民に対しては、草原の美しい景観や貴重な植物たちを維持するためには、牛の糞や、農村の生活のような自らの生活とのかかわりの薄いもの、汚いものも同時に受け入れなければならないことをアピールしていくための手段になります。

伝統的炭焼きは、雑木の萌芽更新など理にかなった里山管理の方法です。現在の人々は、炭に、かつてのエネルギー一辺倒の価値だけを求めているのではなく、部屋に飾る、ご飯に入れ、米の味を引き立たせるなど、生活の潤いを求めているのです。さらに、その炭を自分たちで焼いてみたいと言う人の多さには驚きを隠せません。火は原始の時代から人間の憧れであり、その憧れを手にして人間は歴史を重ねてきました。しかし、経済や時代の流れに乗り、いつしかそれを忘れた時が続いてしまいました。ここでいう火とは、自分たちの原体験から来る故郷への郷愁と言いかえてもいいでしょう。私たちの「ドラム缶窯炭焼き」に飛びつく人達が求めてきたのは、その郷愁を簡単に手に入れられると思ったからのようです。

しかし、昔ながらの炭焼きを続けている方の中には、そんな現在の価値観を素直に受け入れていただけない場合もあり、残念に思う事があります。これから、私たちは、昔ながらの炭焼きは、伝承技術として大切に伝え、一方で、時代を取り込んでいく工夫のお手伝いをしていきたいと願っています。また、生産者と生協など消費者団体との繋ぎ手となり、お互いの立場を理解したうえで生産、消費の良い関係を作り上げ、この間接的な環境保全運動の意義を、双方に理解していただくことができたならと思います。

里地セミナー報告
資源循環型農法

講師：伊藤幸吉さん
（米沢郷牧場代表理事）
日時：６月16日（水）
場所：環境パートナーシップオフィス

こんにちは。竹田さんは彼がらでぃっしゅほーやにいらした時に私の生産物を扱ってくださって以来のお知り合いです。そのご縁で今日はお話します。

今日は、今年の２月に出版された安達先生の書かれた本を持ってきました。私のところのことが書いてあります。また、私たちの活動は最近「日経流通」と言う雑誌にも載りました。

米沢牧場には８つの法人があります。20年くらいなんとか環境を考えた生産をやってきて、ようやくそれを理解してくれる人間が多くなったという感じです。ここのところ５～６年私のところに来る人が増えて、今では月に全国20カ所以上のところから見学にきて下さいます。我々の組織は農協とは別の組織として法人化して運営してきました。ですから政府資金も得られなかったということもあって21年間くらいは独自で活動を行ってきました。無理をしたので当然３年に１回くらいは出頭することもありますよ（笑）。

中国でも環境問題がずいぶん大きい問題になってきていて、米沢牧場の技術はそういうところにも協力しています。

米沢牧場誕生の歴史

私のところは最初は４人で牛の酪農を始めました。きっかけは1974年、昭和48、49年のオイルショックの時に牛の値段が急落し、ひどい目にあったことです。今も牛肉輸入自由化とバブル崩壊とがあいまって値段は下がっていますが、そのときは一時的にべらぼうに下がりました。下がるときは消費者価格に連動するのが半年とか１年後でじわじわと下がるのですが上がる時というのは10日もかかりません。私たちの仕事は牛１頭に20万円くらいかけるのですが、その頃は一頭売れば20万円以上は損をしていたと思います。そのくらいひどい時でした。そこで、それまでは単純に生産物を市場に出せば終わりだったのですが、こんなに金にならないのはおかしいと思い、自分たちで、肉を地元で売ったり、市場に持っていったりし始めたのです。そうすると､そこからいろんなことが見えてきました。まずは経済団体である農協からの圧力です。その圧力のせいで、かえって、農業者がじっとしていたのでは分からない、いろんなことが見えてきました。本当のこと、理不尽な規制、その中でぬくぬくと守られている農家の姿など。ひとりで飛び出してしまってから、20年くらいは政府の制度資金と言うのは借りられなかったので独自で働いた金で施設を増やしてきました。それが、ようやく去年から補助金をもらえるようになったのです。時代は変わるもの。今その金で、100人くらいがやってきて勉強できる施設を作っています。

有機農産物認証法について

４月27日有機農産物認証法の一部改正に関する国会討議の際に、参考人招致されて、15分ほどしゃべらせてもらいました。話し終えた後も、多くの質問を受け

て結局40～50分くらい話をしました。

そこで話したのは有機農産物認証制度をアメリカから直輸入するのは止めて欲しいということです。だいたい有機農産物認証申請にはどのくらい金がかかるのでしょうか。日本の場合は一世帯の農地面積の単位が小さいので一軒一軒が申請していては大変な手間になるのです。去年アメリカの有機農業を見にいってきたのですが、アメリカの場合は１区画が５ ha とか10haと広大なのです。それでもひとつの方式で申請すればいいので楽なのですね。一方、日本は１区画がアメリカの10分の１から100分の１です。例えば九州の農地は平均で５ａしか広さがありません。山形でも畑ならば５ａとか７ａとかが普通です。それをいちいち申請するのには大変なコストと事務作業が必要です。その規模の違いを考えて欲しいと思います。

農家に払うフェアプライス

青山の宿舎で勉強していた時に聞いた話では、今、日本で消費者が払うお金の15%くらいしか農家には届かないそうです。昭和56年には21.6%だったそうですが、現在では15～17%程度しか農家のものにはならないのです。ベトナムや韓国の人がしょっちゅう家に見学に来るのだけれど、日本は流通が進んでいるから、価格の30～40%くらいは農家のものになると思っているようです。「そうではない、15～17%なのだ」というと、驚きますよ。例えば、加工品や完成品、生物全部含めて年間に100万円使ったとしても、そのうち15万円しか農家にはとどかないんです。日本の野野菜は高いといってもそれは農家のせいというよりは流通のところで取っているやつがいるからなんです。私達に文句を言わないで欲しい（笑）。

牛肉の価格

牛肉の価格はここ10年ずっと下がりつづけています。簡単にご紹介するとこんな感じです。

平成元年　1345円／ kg
平成２年　1275円／ kg
平成４年　1100円／ kg
平成６年　 892円／ kg
平成10年　 860円／ kg
平成11年　 766円／ kg

でも、スーパーは21%上がって、生協では43%くらい上がっています。なぜでしょうか。それは、バブルの時に家庭内食から外食に一気に移行した時期があり、その後外食が景気が悪くなったものの、家庭で素材を買ってきて料理をするということが減ったからです。かといって外食は不景気だから出来ない。すると、家での内食に戻る代わりに、出来合いのものや半調理されたものをかってくるという中食が増えたのです。例えばファーストフードのようなところから買って、帰ってから食べる人が増えたのですね。そうするとなお牛の価格は下がります。お袋の味が袋になって売られている。それを食べ慣れた人にとってはそれこそがお袋の味になるというわけです。

バブル期の傲慢

バブルの最盛期に「３Ｋ」という言葉がはやりました。あれはバブルの思いあがった思想だと思います。流通業者とか金融とかいう情報産業が世の中を支配している。そういう活動をしている人が正しくてなんでも決めてしまう。きちんと労働している人が世の中では評価されないという時代でした。３Ｋという言葉が存在すること自体がおかしいと思います。最近それを言う人が少なくなったのは、世の中が少しはまともになったということでしょうか。

有畜複合経営しかない

このように価格が下がりつづける中で生きていくためにはどうしたらいいのでしょうか。私たちは有畜複合経営しかないという結論にたどり着き、かつ、物質が循環される形を作ることを目標にしました。循環の輪を切るのは簡単なのです。薬、抗生物質、土壌薫蒸のどれを使ってもあっという間に輪は切れます。輪を切らない農業にするには有機農業しかありません。さらに、畜産を行わなくては輪にならないのです。

最近一般に無畜化が進んでいます。畜産価格が下がり、誰も商売にできなくなっているからです。しかし、私たちは畜産を交えようと考えました。ところが、か

つては後から来たものが畜産をするのは大変で、できなくて我慢していなくてはならなかったのが、やがて16戸くらいが有畜で14が無蓄、今では２：1で無畜農家の方が多いのです。数が多くなったほうが正しくなるのも不思議な民主主義のルールで、なかなか、それぞれの世帯で畜産をやるのは苦しくなった。そこで畜産を法人化しました。今53人くらいがそれに携わっています。

農家にしわ寄せが

あと、米沢の組織とかについては資料をご覧ください。生い立ちなんかも書いてあります。繰り返しになりますが、農家は消費者が払った値段の15〜17%しか手にしていないと言うことを覚えてください。農産物は高いと言う馬鹿がいますが、それは農家に言うせりふじゃありません。83%をとってる連中がいるんだからそいつらに言えといいたいです。

アンパンを上からぎゅっと押しつぶした時に、あんこのところがやわらかかったら下側のパン生地にかかる圧力を緩和できるけれど、あんこのところが今はこんぺい糖みたいに硬くなってしまった。だから、一番下の生地のところに直接しわ寄せが来るんです。上は消費者、真ん中は量販店や流通業者、下の生産者の方ばかりがつぶれているのです。

米沢郷牧場の戦略

先ほども言いましたが、米沢郷牧場は政府からの援助がまったくなかったので、無駄をなくすことと無理をしないことを心がけました。そして、物をなるべく買わない、なるべく捨てない、有効利用することで、循環させるようにしました。そのためには複合経営です。

また、米沢の目標のひとつは個別の自立した農家を守り育てることです。守り、育てるというのが大事です。企業の寿命は知れていて30〜40年くらいだと思います。再編があってすぐにつぶれますね。そういう戦いに残って、相手から奪って、金を貯めて山を買っても、石油のせいで山の石炭もだめになって。それで金融とか保険とかに手を出して、そうして生き延びる。それはきりがない。

農協でも同じです。昔は我が町、高畠町に６つの農協がありました。和田や安尾なんかですね。50年前くらいに生産組合や農業協同組合ができたのが最初です。それが25年くらいで生き延びられなくなりました。そこで、それが高畠町という行政体の農協ひとつになりました。その行政体も20年くらいしか生きられませんでした。次は３市５町の農協が合併したのです。後は、奈良県が全県農協を達成したのと同様にひとつの農協になるしかないでしょう。こんなふうに、農協や企業なんていうものの寿命はこれからはますます短くなると私は思っています。だからこそ、個人の自立的な経営をしていったほうがいいと思います。

農業の形

兼業であれ専業であれ、どっちでもいいからこういう勝手な生き方をしていったほうがいいというのが私の基本スタンスです。どっちかというと兼業のほうが心も金も豊かかもしれません。形はどうでもいいと思うのです。60歳になるとたいていあまり仕事がなくなりますが、まだまだできる仕事はあります。私の父はガンで最近死んだのですが、その３カ月前くらい前まで田んぼで仕事をしていました。80歳までは平気で農業に関われるのです。農地があればできます。こういう高齢者の方が完全に自立をするのは大変です。しかし基本は他人に支配されないということ、つまり小作人にならないということ、金で支配されないということです。それを守って若い人と協力していけば農業は続けられるし、年をとってもできる作業はいっぱいあるのです。老人が倒れてからそこを買い取ろうとするようなやつはろくなやつじゃない。今でも農家は金に支配される小作人です。小規模でブロイラーを飼っていたって、卵や資料の流れにインテグレーションされているのですから。今日本にあるインテグレーションされていなくて最も大きい農場が米沢郷農場です。

農協支配からの脱出

苦労もありました。配合飼料を使わないといったら、農協が餌を売ってくれません。しょうがないので自分

たちで餌を作ったのです。工場に直接お願いに行って原料を買わせてもらったり、工夫しました。すると、餌は米沢のほうが安くなってんですよ。農協でろくなことはないと思いました。農協系の農民は農協から借金をし、同時に農協からはいっぱい保険だ信用だと金を出すように言われる。それはつまりは貧乏人同士金を奪い合っていることです。だから、悲惨なのです。しかし農家は制度支援を頼もうと思うと農協を窓口とするしかありません。農協から物を買いますし、農協から金を借りれば冷蔵庫を買えるとかそういう風になる。よそが買っていると、自分のところも高いものを買わないといけないような気がしてね。でも借りると言ったって、貧乏人は高い金利でしか借りられない。農協の金利なんて山形銀行より高くて、今でも1.5%くらいもするのです。富士銀行とか地方銀行から借りても今は1.4%くらいですのにね。あと、面白いことに、交際費の控除は貧資本金5,000万円以上の大会社には認められないんですって。その下1,000万円までの大きさの会社だと300万くらい認められるんです。大きい会社に小さい会社は接待することが認められるということでしょうかねえ。こういういろんなしくみを見ていると貧乏人が這い上がるのは本当に大変な世の中だと思います。

さて、こういった訳で、農協を抜けようと思ったのですが、村の中で当時農協から抜けるということは家族の負担が大きいことは目に見えていたので迷いました。資金は貸してもらえなくなるでしょうしね。現に米沢郷牧場は21年間、外部からはまったく金を借りませんでした。貧乏人は金を借りたらおしまいです(笑)。借りた瞬間に支配されるということです。金を次から次へと取られるにまかせるしかありません。20億、30億、物を販売するのに農協というような系統を通すと、手数料を取られるだけで成り立たずに死んでしまう。例えば２%手数料を取られたとして、30億のものを売ると、地元の農協を通しただけで6,000万払っているわけですよね。10年経てば６億になります。小さな所だと最初から赤字になりますよ。

メーカーからの独立

メーカーから何かを買う場合も、検査をして管理が悪いところからは買わないようにしています。もし悪いものがあったり、値が上がったりしても１社としか取引していなければ一揆するしかありません。そうならないようにね。

今は会社はどこも赤字で、苦しいようです。土木所は黒字決算だけど７割の会社ではその決算書を書いて、強引に黒字にしているそうです。黒字にするので大変だって３年前くらいから言っているのを聞いています。黒字にして税金を納めているので本当は損をしているそうです(笑)。税金が８～９%ですからね。最近は公共の仕事ももらえないし、経済が良くなるのはずいぶん大変ですね。

なんにせよ、私のところはそうやって独立を保っているので、ひな、えさ、飼料で他のところより4,000万円くらい安く買っています。

農業法人化

今、農業の法人化の話がありますが、貧乏人同士が法人化しても貧乏なままです。貧乏根性があると戦えない。１＋１は２だと信じている人が多いが、それは単なる数学の約束事であって、実際は１＋１＋１＝0.7になるところは多いのです。現実は算数の決まりではないのです。私は今の枠の中で法人化を考えても展望はないと思います。既存の枠を超えて展望を持っているところのみが生き残れるのです。法人化に応じて、資本金についても借り入れをさせるという話がありましたが、馬鹿なことだと思います。自分が３年でも５年でもかけて仕事を起こそうというときに、資本金まで他人に借りてやろうというのは生きようという根性がないのと同義です。法人化してから失敗すると後で迷惑がかかります。個別家族経営で失敗しても迷惑をかける人は少ないけれど、法人になってから倒産するとずいぶん多くの人に迷惑をかけます。

そうしないために、そのために法人はひとりひとりが他の人ができないものをやる気力が必要です。

米沢郷牧場～これからの戦略

まず、15～17%といわれる農家の取り分の割合を高めるために産直を増やして、消費者に近づこうとして

いますし、次に加工まで手がけることで収益の割合を高めようとしています。

それから、環境問題に関しては遺伝子組み換えをしていないおからを引き取ってエサを作っています。工場も自分で作っているのです。さらにＩＳＯ14000をとろうとしています。仲間の大松という者が先月大阪で環境監査の講習会に行って合格してきたのです。

３つ目に、儲けの材料を提供する者にはなりたくないと思っています。なるべく地元で地元の人たちと一緒にすぐ食べられる状態のものを提供したいのです。すぐ食べられるものと言うのは野菜や果物のことですね。それは産直に近い形で、ま、90%以上は産直でやりたいと思っています。

４つ目は無駄を出さない、無理をしないことです。

米沢郷牧場の技術

有機栽培無農薬が基本です。日本では一番広い有機農業の農場であると自負しています。組識としては、生産者を競わせようということで生産部会をいっぱい作っていています。今10くらいあるでしょうか。中でも米の生産部会が一番まじめですね。10年間くらい毎年田んぼを循環させてデータを取っているのです。

今までは、我々は売り方には一生懸命でした。作り方はどれも一緒でした。でも、これからは作り方にもこだわりたいと思っています。農作物はやはり、金にしてなんぼのもの。金にできるかできないか、きちんと農作物を評価してもらわなくてはなりません。食うものを作っているのだから、食って評価してもらえるものを作れるかどうかが大切です。

生産技術の開発は、若い連中12人くらいが技術開発委員会を作っています。私の長男がその代表をしています。そのメンバーのうち３分の２がいろんな大学を卒業しているので、いろんな大学と関係があって、いろんな大学の先生方がタダで来てくれるのです。実際の現場に来ることで大学でも先生方も刺激を受けるようです。大学と、農場との共同でできることがいっぱいあります。現場を知っているから絶対に負けないことは「仮説を作れる」ことです。仮説までは何とか自分たちで作れる。その時点でどうしてそうなったのかを大学に調べてもらえばいいのです。13くらい異なる割合で飼料を配合し、それを同じ家畜にやる実験をおこなったこともあります。生育データを生産部会に成果の連絡をし、発表したりもしています。

スライドを見ながらの説明

以下はスライドを見ながらの説明でした。

＜ゴミの堆肥化＞

レインボープランもそうですが、生ゴミを集める際の最も大きな問題は汚水です。井戸水が汚染されたりして、非常にまずいですね。レインボープランの姿勢は評価しますが、生ごみを有機肥料にするのには危険性がいっぱいあって、いいとは言えないと思います。生ごみの最終処分は有毒になっているのではないかという危険性を感じています。

我々は除草剤として、かつてはＭＯ（ＣＮＰ）を使ってきました。毒性が低くていいといわれてきたのですが、そうではなかったのです。しかし、私は農家には責任はないと思う。農家はそれを分からないで使ったのですから。悪いのは、作ったメーカーだと思います。知っていて言わなかったのですよ。今、ダイオキシンが問題になって、野瀬町が焼却場を解体していますが、焼却場のダイオキシン濃度など水田の濃度と比べたらいやというほど低いのです。幸い米はダイオキシンは吸収しないので、売れて助かっていますが、ナス科作物というのはそういったものの吸収力がばつぐんにいいのです。30万円くらいかけてナスやキュウリ、ジャガイモを調べるとダイオキシンが検出されるのです。

そういったことを考えると、レインボープランでは、あのようにいろんな、しかも分別がちゃんとなっているか何もわからない、合成洗剤をいっぱい使っている生ごみを使っているという点で非常に危険ではないかと思います。ゴミの中に入っている重金属はどうしようもないのです。また、堆肥化工場でバケツを洗うのに使っているのは洗剤です。それが堆肥になって、再びすべて畑に入るのは構わないのでしょうか。優良農地といわれて喜んで、毒を投入する。これまでやってきたことを続けるのと同じではないでしょうか。これまでは知らずにやってきたことを今度は知ってやるの

でしょうか。

ゴミだけでなく、街路樹を拾っての堆肥化もできなくなりました。排気ガスの中に鉛とかいろんな物が入っているからです。ハイオクタンというガソリンの排気ガスを街路樹が吸っていたのです。その落ち葉を集めて作った堆肥をいいものだと思って使っていました。

それと同じようなことが生ごみリサイクルの中でもあるのではないでしょうか。今、その点を研究機関に諮ろうと思っています。

＜今も百姓がいる＞

米沢郷牧場ではみな、いろんな物を作っています。果物・水田・畑という３つは必ずやっています。

普通の日本の農家は海外からの農産物の輸入に反対といっていて、それに賛成をする人はいません。しかし、ほとんどの連中は田んぼばっかり作っているか、畑ばっかり。自分の作っていない野菜や果物はスーパーから買ってくるのです。そこで売られているものはどこから来るのか。７割は海外から入れているので、わたしは「おまえら輸入反対って絶対いえないよ」と言いたいです。百姓であって米しか作っていないというのは根性が悪いですねえ。しかも彼らは自分の作った米すら食べていないのです。どういうことかというと、今は自分のところの収穫はカントリーエレベーターにすべて入れています。そうすると、そのエレベータの利用者が200人いるとすると同じ銘柄のコシヒカリが200人分入ります。そこから家族の分をもらうので200分の１の確率でしか自分の作った米を食うことはできないんです。このやり方に地元の行政は補助金をくれますし、違ったやり方をしようとすると農協はだめだと圧力をかけて、地元の担当がかわいそうだって言うわけ。

うちは、ライスセンターで個人別、品種別、栽培型別に精米しています。除草剤１回っていう風に、何を何回使ったがすべてわかるようにも管理されています。

また、畑の野菜も米も果物も必ず一軒の家で作っています。これを作っていない農家は一軒もありません。畜産もしている農家が54件。鶏と牛は個人のほかに法人でも作っていますが。

＜鶏の餌＞

鶏の餌は餌工場で作っています。遺伝子組み換えもしていない飼料を去年の９月から仕入れています。それに菌体飼料を混ぜて発酵飼料にし、鶏にも牛にも食わすのです。さらに鶏糞を６割くらいいれて、おからを入れて、それで牛を飼っています。実は鶏の糞は7割くらいは消化されていなくて、まだ食べるところがたくさんあるんですよ。また、えさをこぼすから敷き料に落ちたそれも餌にしています。

この技術は中国にも情報が伝わって、技術を教えて欲しいといわれたことがあります。貧乏だからね。加藤光吉先生も来られて研究していかれました。それと、キューバの有機農業は盛んでね、あの国もお金がないもんだから有機しかないみたいなの。

さて、うちでは生ごみに菌体飼料を、鶏糞と牛糞に菌糸と米の皮を入れるんです。そうすると、３～５時間で餌になり、また堆肥になります。この装置で800kg処理できるので、１日50トンくらいの餌を作っています。

＜米の使い道＞

まず、米は食べてもらいますよ。しかし、実は籾殻のほうが足りなくて困っているのです。この精米機は胚芽精米機といって、１日60kg、200俵以上、つまり2トン近く精米するのですが、餌や有機農業で大量に使っている籾殻が必要なのです。まず、菌体ボカシとして田んぼに撒いています。それから、鶏や牛の下に敷いています。この時の籾殻は６割は新しい籾殻、４割は土です。籾殻は1,000ha、つまり千町歩以上は集めているのですが。

＜排泄物＞

果物や野菜のかすは、人間が食べるほうが多いのでほとんど出ません。たとえ少し出たとしても鶏が食べるので問題はありません。問題は牛や鶏、人間の排泄物です。

小便水はかつてはＥＭ菌を使って処理していましたが、あれは高いんですよ。私のところのような規模では5,000～6,000万円かかります。菌体は自分でいくつでも作れますからね、今はそれを利用しています。消費者に菌体を売ることもあります。小便は活性水となって飼料工場へいきます。畜産の工場から外に出た段

階で小便は飲める､糞は食べられるようにするのです。これは田んぼに使っているパイプで、ここに穴があって小便が流れ出す様にしています。このポンプのところに来た時には飲めるのです。この水槽は神戸震災の時にもらってきたものです。この酒樽に網で包んだ花崗岩と石灰岩を入れています。土にはものすごい浄化作用があって、上から排泄物を流しても山の土を通ってきた水は飲めますよね。富士山の水も飲めるのはそのためです。その性質を利用して、こうして石と土に生息する土壌微生物群の力を借り、俺のところでは45日で飲めるようになっています。このタンクで70トン貯蔵できます。

ここで作った活性水は好評で、ペットボトルに入れて消費者の所に供給もしています。ペット用などに使っているようです。200倍液を水で割って飲むこともできます。米沢では200リットルくらい一軒で使っていますよ。

＜食べ物は自分のところで作る＞

私のところで、帰化した残留孤児の人が働いています。彼が家から持ってきたおにぎりとコンビニで買ったおにぎりを両方食い忘れて、放っておいた。そうしたら、家から持ってきたおにぎりはすぐにどろどろになってしまったのに、コンビニのおにぎりはいつまでもつやつやなんだそうです。食べられそうに見えるくらい。でも、食べなかったそうですが（笑）。その話を聞いて以来、うちでコンビニ弁当を買う人はいなくなりましたね。確かにコンビニの弁当は３日置いておいても食えるのです。でもそれは、ソルビン酸が大量にふりかけられているという証明です。いいホテルなんかで宴会場でご飯を食べると残り物を部屋に持っていかないでください、って必ず言われますよね。それは添加物を何も入れていないからだと思うんです。反対に、コンビニの弁当は賞味期限を長く長く設定している。それでも大丈夫なように作っています。だから、いろんなものをぶち込むわけですね。

鶏の餌も同じです。飼料の賞味期限なんて聞いたことはありません。でも、普通なら飼料はかびるんですよ。でも、それが起こらないのは防カビ剤が入っているからです。また、鶏の糞はころころだというイメージがあるでしょうが、あれは餌に軟便防止剤も入っているからです。でも、こういう薬漬けにはきりがないですね。バンコマイシンに、バンコマイシン耐性のウィルスが出て、バンコマイシンが効かなくなって問題になりました。だからこそ、自分のところで餌を作らないといけないと思ったのです。

＜建材もリサイクル＞

新しい畜舎を建てました。建坪だけで7600坪くらいという広さなので、もしもまともに設計料を払えばそれだけで300万くらい取られるでしょうね。でも私は設計料を払った試しがないんです。基礎設計は全部自分でします。建材としてつかったこの柱も近所の電気工事の人にもらった古くなった電信柱なんです。ま、認可をもらうために最後の10万くらいは払うのですがね。

＜シンプルイズベスト＞

これが堆肥を散布する機械です。ダイテックという会社の物で､この機械は非常にシンプルでいいのです。もしも壊れたときに修理が楽ですし、日々の掃除の手間も要らないんです。動かなくなったときに掃除するだけでね。チェーンとかがあるのはだめ。動かなくなった時に大変です。糞を人力でかき出したり、直すまで２、３日動かせないと周りが糞の山になってしまいますから、それも大変です。

＜牛の種類＞

フランスの牛を飼っています。ＮＨＫで牛肉の消費が増えて、食糧危機が起きるとかいっていました。国連のデクエヤル事務総長の食糧問題が深刻だという台詞もあります。私達は人間の食べるものを飼料にはしません。

＜堆肥化＞

これが、完成した堆肥です。人間が食べることもできます。ま、うまかないけどね。でも、カモシカが食いに来るくらいなんですよ。これは米ぬかと混ぜて発酵させているところです。堆肥化させると重量は変わらないけれど、かさが少なくなるのです。そしてさらさらになる。先ほど帰化した青年の話をしましたが、中国の連中というのは面白くて、いろいろな発見を教えてくれる。この土はだいたい40日くらいででき上がるのですが、彼がこの土を見ていて、完成が近くなる

につれて虫の数が減っていくことに気づいたんです。食い物がなくなっているからでしょうね。

今、多くの有機農業家がやっている堆肥は入れれば余計悪いのは当たり前。一回でも殺虫剤を撒くと、微生物のバランスが崩れるのです。ぬかみそ床にクレゾールを撒いちゃいけないのと同じ、農場は味噌蔵といっしょだから大切に育てなくてはなりません。この建物の中では一切殺虫剤は使わないのです。でもハエはいなくて蜘蛛の巣だけというなかなかいい状態です。

堆肥の状態は窒素が１％、リン酸６％、カリ４％。これは堆肥に種をまいても芽が出る割合です。袋詰の機械があるのですが、これらの堆肥は作ったらすぐに使うから売る分が無いのが現状です。

＜敷き料の取り替え＞

うちでは敷き料に糞を敷いているのです。だから、糞出しは２、３カ月しなくても大丈夫です。糞を堆肥化した土なので、当然微生物はいっぱいいますよね。そこにさらに活性水をかけます。つまり、普通の水の150倍くらいのミネラルを補給するのです。すると、そこは微生物だらけになる。だから、分解がものすごくいいのです。そのおかげで畜産していても週に２日は休みというのを実践しています。日曜祭日隔週土曜日はきちんと休みなのですよ。農家でこんなのは最高だと思います。でもね、365日休みなしなんて馬鹿なこと続けられませんよ。

＜健康な鶏＞

これは７万羽の鶏です。夏は全部開放しています。こういうふうにね。普通は開放鶏舎ではありません。真っ暗にして、こういう羽根のない鶏まで作って、寝て食ってをするだけにしておけば一番太るのですからね。でも病気が出るのは確かです。だから、飼料にまたいろいろ混ぜるんですよ。

うちの鶏は内臓を見るとその健康度が分かります。これが普通の鶏の肝臓です。オレンジになっているのは、人間でいう脂肪肝だからです。うちのはこんなに鮮やかな真っ赤でしょう。内臓を見れば一目瞭然なのです。また、うちの砂肝の大きさは普通の1.5～２倍くらい大きいのです。これを生協に卸しているのですが、こんなの、ふつうはみられません。

＜米＞

これがファーマーズクラブ赤とんぼの栽培基準です。日本では米沢が日本一でしょう。

次のスライドは苗床をみんなで植えているところです。うちの田んぼの中には今でもカブトエビが山ほどいて、手でちょっとすくっただけで10も30もすくえるのですよ。

今のところ水田は４町２反、米にして450俵くらいを有機栽培にしています。私の息子がずっと続けているのですが、９年間一度も農薬を使ったことがありません。私達のところではポット苗にしているので、根っこを切らなくてはならない。こういう過程を経て見事な稲になります。殺虫剤だの殺菌だの何にも撒かなくていいのです。

日本中から毎年視察団がきます。福岡なんかからもしょっちゅう来る。やっぱり一村一品運動の町だからかね。で、みんなで巡回をしているところです。葉の数とか茎の数とか色とかを記録するのです。この写真の段階で、15葉くらいになっていますね。

ここで、活性水を流して、いわば点滴しているのです。95年にイモチ病が大発生した時もうちは生物活性水を200倍に薄めたものしか使わなかったです。それと、木酢液くらいですかね。とにかく農薬は１回も使わなかったのです。その年は無農薬の人はいつもなら60俵とれるところを３俵くらいしか取れなかったようですが、私のところでは11俵もとれました。

こいつら、若い連中はオペレーターです。いつ、どこの田んぼを収穫するかというのをチェックしているのです。ほら、これは見事な稲ですね。

＜活性水パワー＞

これは実にトマトらしいトマトです。普通はトマトトーンというホルモンを使うのですが、うちは使いません。米は収穫がいつかだいたい分かるからその１カ月前くらいに農薬の散布を止めることができます。けれど、野菜は農薬をかけると、それをかけた日に出荷することもありえますよね。それを防ぐために農薬は使わないのです。

キュウリはかぼちゃに接木しています。かぼちゃは連作障害がでないからです。これは、最近うちで１カ所から４つも実が出るナスやキュウリが出てきた例です。路地ナスなんですが、普通はこんなことはありま

せんよね。菊も切ったところから、いつまでも根が出てくるので２カ月くらいもつのです。

果物では農薬をゼロには絶対できません。でも、活性水を使うとその回数を減らすことはできます。こんな風にリンゴでも、その葉っぱが小さくなって厚くなるのです。

宅地でも農薬を使うと一発でだめになります。普通は日本で雑草が生えないなんて考えられないけれど、そういうことがないように、宅地の家と土地との間には100%除草剤を撒いているようです。日本で農薬を使わないというのは本当に希少になってきました。

＜終わりに＞

今日はこれで終わりにします。

来月か再来月にテレビ朝日の宇宙船地球号でうちの話が放映されます。良かったら見てくださいね。

推 薦 書 案 内

■『農のシステム・農の文化～「米沢郷牧場」が新しい農をつくる～』
安達生恒・著（ダイヤモンド社）
今回の里地セミナーで紹介した、伊藤幸吉さんの「米沢郷牧場」。社会農学研究所所長の安達氏が徹底的に特徴を紹介しました。

■『風土舎』玉井袈裟男著（新葉社）
■『続・自己活性化の実験』玉井袈裟男著（新葉社）
■『自己発見の技術～むらで生まれた発想～』玉井袈裟男著（農文協）
■『新むらづくり物語－暗い感情を元手として－』
玉井袈裟男著（ABC フォーラム）
■『風のノート』玉井袈裟男著（研光新社）
■『新むらづくり論』玉井袈裟男著（信濃毎日新聞社）
里地セミナーで講演をいただいた玉井袈裟男さんの著書です。
むとすノート、ご講演報告、現場での体験・事例など、わかりやすく、おもしろく紹介されています。

■『田舎で休日～こんな田舎がある、こんな夏がある～vol.２　1999夏号』
（小学館）
小学館 GREEN Mook の第２号です。今回の特集は「島体験」。夏休みに向けての各地での様々なイベントの紹介がされています。

■『ビオシティ　no.16』
～祟りとご利益のエコロジー・日本の生態学とデザイン～（（株）ビオシティー）

日本各地様々な地域で環境を考えたまちづくりが行われています。日本の文化から生まれる景観、生態学、それを活かしたまちづくりをいかに行っていくか？先進的地域からのたくさんの報告もされています。

里地セミナー報告
むらづくり論・
むらで生まれた発想・自己発見の技法

講師：玉井袈裟男さん
（元信州大学教授・風土舎主宰）
日時：６月15日（火）
場所：環境パートナーシップオフィス

こんにちは、僕は大正生まれの74歳です。今日は日本のじいさんが若者に聞かせるような話になると思います。僕らは高齢者で社会の中では弱者といわれています。年金をもらって暮らしています。でも、本当の弱者はどっちでしょうか？　今の若者が年をとる頃には年金もでない、環境は悪化している、食糧はどうなっているか。経済的な利益を追いもとめて、コンクリートで囲まれた都市に暮らしている若者たちが前方を歩んでいるというけど本当にそうでしょうか。今日は日本の将来を抱えている若者にはまだまだ負けないぞと思いながら来ました。

学習と教育

大学を卒業したのは昭和23年。戦争で若者たちはみんな死んでいってしまったので就職先はたくさんあった。僕は百姓の息子なので、虐げられている農民の先頭に立って、農民運動を行いたいと思っていたので、就職先はみな断ってしまった。「俺は農民運動の指導者になるつもりだ」と親父に話した。当時の親父は大学まで出たら役人になることが一番の理想だと考えていたようだった。親父は小学校しか出ていなかったが、何か言うと、私がやっつけられてしまっていた。しかし、農村は日本の近代化において国内植民地となり、そのため日本は豊かになった。行政の役目は税を集めて、役人の頭でそのお金をどうやって使おうかと考えている。親父に「俺はそんなことをしたくない」と言ったら黙って草をむしっていた。反論してくれれば振り切って、運動をやれたが、逆に黙ってしまったので困ってしまった。

たまたま地元に信州大学ができるというので、教師が必要だったが集まらない。先輩に、しばらく名前を貸してくれと言われ、そのまま今日までに至っている。非常にありがたかったことは何をやっても誰も何も言わなかったこと。戦後のそんな時期だった。

ちょうどその頃長野県で長野農村文化協会を立ち上げた八木林二という人がいて、彼は東大を出た陸軍の大尉であった。彼と行き会ったのが僕の運命を変えた。彼が青年を集めて公開討論をやっていたのを後ろの方で聴いた。当時の問題は農民が社会的な活動をしようとすると、農業の仕事がおろそかになり両立が難しい。これがテーマであった。彼は「社会的な運動をするときは自己犠牲がやむをえない」と言った。僕は腹の中で「人のために自分が犠牲にできるか」と思っていて、討論の後、彼のところに異議申し立てに言った。「本当にできるのか」と。そうしたら「君は君の考えがある。僕は僕の考えがある。いろんな考えの人が集まって社会ができている。それが民主主義というものだろ。私は農村青年を集めて運動を起こそうとしているので、君は君の考えで参加してくれ」ということでそこに関わりはじめた。そうして僕は、昼間は学校に行って“教育”を行い、夜は農村青年の“学習”を行った。

なぜ、彼は農村青年の学習を行おうとしたのかというと、戦争に負けた時に、農村出身の兵隊たちが「いつ俺たちは家に帰してもらえるのかな。稲刈りまでに帰りたいな」と言う声を聴いた。国家は負けたばかりで上はてんやわんやなのに、青年たちはそれよりも稲刈りのほうが大切と考えている。戦後の復興には青年には学習が大切ではないかと思い、長野県に残って活動を始めた。以来今日まで農村青年の学習運動に関わっている。

彼はテキストを作って長野県下10,000人の青年の学習を行った。１年に１回の勉強会を行った。１年に２回くらいは各地域で集まっての勉強会を行ってきた。その頃、公民館や農業改良普及所などができ上がり、国も考えるようになってきた。しかし、国は教育。こちらは学習。その頃から違いが明らかであった。公的社会事業があったが、我々はどうしてもそれの反体制派となって活動してきた。

それから国はずうっと教育を行ってきたがその中で何回もぶつかった。

10年前に社会教育を廃止して、生涯学習局ができたが、いまだに本当の学習は少ないと思う。

当時東大の社会教育の人たちが教育と学習の違いを書いていたが、僕はよくわからなかった。「おい、先生、教育と学習の違いは何だ」と聞いたが先生たちの言っているはわからない。現場の人間もわからず、結局以前と同じ教育を行っていた。村のおっさんたちには、「俺たちにもわかるように違いを一言で言ってくれ」と言われたが困難だった。そこで学んだ。教育には働きかける客体がある。客体は学校では生徒、地域社会では住民。そして主体が学校では先生、家庭では親。それらが客体に働きかけてあるべき姿に変える。そして望ましい住民や市民になる。

「ほうっておけば税金など払う気にならない人に、払わせるようにすることが教育。学習はどうやってその税金をごまかすかを学ぶこと」と説明したら「じゃぁ、俺たちは学習をしているのだな」と納得していた。教育は体制維持のために働き、学習は体制批判のように働く。昭和20～30年代には、反体制側にあり、口だけでなく、行動していたから。「おまえＧＨＱのリストに載っているから気をつけろ」と言われたが、ありがたいことに、大学にいたので、弾圧を受けたことはなかった。

学習は「困ったときにどうするか」が基本的なテーマ。教育は「困ったときにこういう手当てをすれば困らないよ」というもの。しかし、困ったことはたくさん出てくる。誰もこれを教えてくれない。だって困ったことは千差万別ですよ。私は大学ではなく、村の連中と一緒にいろいろやってたくさんのことを学んだ。

栄村での学習

長野県に栄村がある。ここで昭和31年頃ガーデントラクターを買った。豪雪地帯のため、冬になると雪で使えない。ところが全国一律に税金が700円かかる。

私は、暗い感情は技術の母と思っている。半年雪のため使えないのに、村の人は税金がかかることに困った困ったと言っていた。みんなが暗い感情になっていた。「税金を半額にしてもらおう」と、ナンバーに「栄村」と書いてあったので役場へ「税金を半額にまけてくれ」とお願いに行った。役場の人間も村の人間だから、使えないのはわかる。でも「トラクターには輪があるので、雪のある時は雪のない土地へ持って行って使えばいい」と理屈をつけた。それなら「ナンバーを外して役場に預けたらどうだ」と言った。この後どうした訳か350円になってしまった。

数年後、今度はマイカーが入ってきた。ガーデントラクターの税金の例があったので車の税金がここだけ60%になった。ところが他の豪雪地帯は全国と同じ。何故なのか？　これは栄村の人たちが暗い感情から学習をしているから。他のところは学習をしていない。

また、栄村に昭和30年代中頃、テレビが入ってきたが画面に線が入って映らなかった。これで暗い感情になった。ここでも学習が必要。「サテライト局を作ってくれ」と長野ＮＨＫに言った。そうしたらＮＨＫ側は「住民が半額出してくれ」と言う。しかし、テレビは村で２台。「映らないから、払わなくてもいいか」と言ったら「それは法律によってだめだ」と言われる。そこで六法全書を読んだら一条に「これはＮＨＫが全国に電波が届くということを目的に作られている」と書いてある。これならＮＨＫは第一条違反になる。さらに交渉をしようとしたがだめだった。そこで、百姓たちは訴訟を冬に起こそうとした。

ついでに言うと、百姓一揆は冬にある。夏は忙しく

てできないからだ。

そうしたら「待ってくれ」と言って30分協議した結果、「あなたたちは特別だから。これは内緒にしてくれ」と言ってＮＨＫの全額負担でサテライト局を作ってくれた。私は多くのところでこれを話している。しかし、一度もＮＨＫから怒られたことがない。なぜならほかのところは栄村のように暗い感情から学習して同じことをやらないからだ。

学習って言うのは暗い感情からどうやって抜け出すかということ。これは皆さんも腹の中に収めておいてほしい。農村には暗い感情がたくさんある。しかし、その感情がぴしっとあわない。

レンゲからの学習

昭和36年、農業基本法ができる前に、各村で「豚の頭数を増やそう」とか考えていた。スケールを大きくしても農協は儲からない。そこで農協にごやっかいにならず、自分たちで何かしようと考えた。裏作をなくしてレンゲを植えて、それを豚の飼料に混ぜようとした。しかし、豚の胃が弱くてレンゲをたくさん食べさせられない。そこで、種の掛け合わせをしてもっと強い豚を作ろうとしていたら長野県から怒られた。そこでみんなで暗い感情で考えた。そして考えたのは「しゃべったのがいけない、黙ってやればわからない」ということで、こっそりやることにした。いよいよ子豚が来る時になったら親父たちが反対した。新種の黒豚は元気がいいから逃げてほかの畑を荒らしたら困るという。そこで、親父のいない家に黒豚を集めた。

そして今度はレンゲを作る。空いている畑はたくさんある。しかし農地改革から10年しかたっていないからみんな畑を貸したがらない。９月中旬にレンゲの種を蒔く時期になっても、誰も貸してくれない。そこで「とにかく蒔くだけ撒こう」ということで雨の日にこっそり蒔いてしまった。５月になって花が咲いて「どうやってそれを刈ろうか」と考え、レンゲの咲く畑を持つ家に、肥料を持っていって「お宅のレンゲをこれと交換してくれますか」と言って交換した。こうやって「あっちもいい、こっちもいい」ということを考えればあっちはたいがいＯＫする。私はそこからしばらく豚飼いをしていた。

経営斬新を興したと言ってめちゃくちゃ批判を受けた。右派からも左派からも。しかし、怒られたって何とか食っていかなければいけない。そのとき、ある党の農政批判家が機関紙に「小農経営を守れ」と書いてあった。そこで、その先生を招いてお話をしてもらった。しかし、その話がよくわからない。私は「ひとつだけ事例を挙げてくれませんか」と質問をしたら「それは諸君の実践において答えを見出さなければならない」と言う。「おい、玉井さんあの人はわからないんだよ。黙っとけよ」と隣の人に言われた。ちなみに現在その人はある党のえらい人になっているからおかしな話だ。

日本ってのはどうしてこんなにうそっぱちが多いんだろう。右も左もうそばっかり。だから自分で考えなければならない。

貿易自由化からの学習

昭和59年にタバコをやめた。そして200円ずつ貯金をした。16000円貯まって、これで何をしようかな、とその硬貨をつかんだ。そのとき、レンゲの種を蒔く手の感触を思い出した。日本にレンゲがなくなってから20年も経っていた。そこでレンゲを蒔くことを考えた。すぐに人が畑を貸してくれて35ａ蒔いた。そして毎年レンゲの花見を楽しんだ。

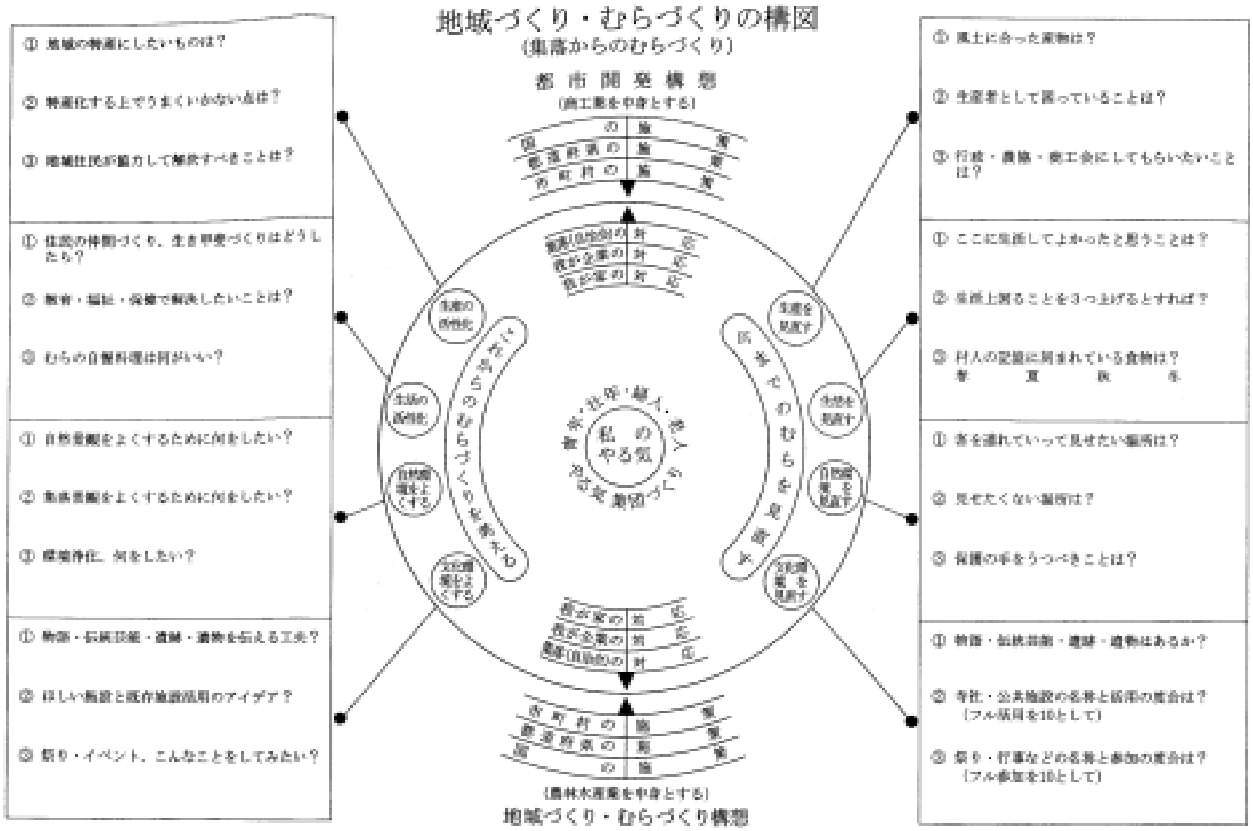
昭和58年になったら米の貿易自由化の話が出た。今までは、原価割れてしている米が農家を貧しくしてしまうということだったが実際手間賃は得ることができた。しかし、自由化では絶対日本の米農家は負けると思った。これは困った。そこで、貿易の自由化になっても負けない米作りをやろうと思った。レンゲを蒔いて肥料は最小限に押さえる。農薬は一切使わない安全な米を作る。労賃は多少高くなるけれど、これをよしとしてくれる人だけとつながって生きていこうと思った。これをしたら農協に怒られた。「自由化に反対しているのに、どうして負けたときの対策を考えるのか」と言われたが、私は負けると思ったので、これでさらにレンゲ米という商標を取った。ところがこれは良く収穫できる。農薬散布の意味はない。その米には商標がつく。10キロ7000円で売った。

私は当時国立大学の教授で税金で生きていたので消

費者と生産者どちらの人のことも考えて生きていかなければいけない。ある時、テレビで落語家が「本日御入場の皆様方とテレビのチャンネルを合わせて聞いて下さっている方々だけのお幸せをお祈りします」と言っていた。そうか、この米を食ってくれる人の幸せを考えていればいいのか。この米がいいや、という人と結びついていこうと思った。しかし、3000俵しかとれない。しかし、この米が良いと言って下さる人は増えてきた。そんな時、京都の園部町の農協が「私にも入れてくれ」と言って一俵1,000円で商標を貸すことになった。だんだんその値段は下がってとうとう今はただになった。

その時の農協組合長は町長になった。学校給食において古米で政府流通の２等米を使えという食糧庁の意見があり、「そんなひどい話はない」と町長になった彼は直談判に行った。そこで認められ、自分たちの米を子どもたちに食わせている。

京都は給食センターで安い米を高く食わせようとしている。町長が学校教育に口を出すとは、と言われる。しかし、予算は町長の一任で決まるから「予算決議せず出さない」といえば、出さなくていいことになる。



地域づくりむらづくりの構図（図①）

ひとつひとつ分解してしまうと村づくりが何かわからないから構図を書いてみた。

・真中の大きな円が集落。自分の人生を構築していく舞台はやはり集落。真中には、私のやる気がある。
・上の方に都市開発構想、下の方に地域・むらづくり構想。むらづくりの推進委員会の会合に行くと、実際にこの図のように座っている。
・円の境目は内からの力（地域からの内発力）と外側からの力（行政主導）が向き合っている。
・大きな円の右側には「今までのむらを見直す」、左側には「これからのむらづくりを考える」、これは今までの反省となり、左側には価値のあるものは磨き、悪いところは直して新しい価値を見出す工夫を

する。さらに、漠然としていてわかりにくいので、生産、生活、自然環境、生活環境（文化）、とポイントをあげている。そして、各ポイントに実際に自分の身の周りを考えて書き込む欄がある。ここに書き込んでいけば実際の構図ができ上がるようになっている。

図はアンケート用紙のように使える。しかし、自治体が配ってやっても書かない。グループに渡し、グループディスカッションに使ってほしいのだけれど。

ところがこんなのも都市の直轄。上（国）からきたことはやるけれど、他はやらない。このアンケートを、老人会でやったら事業がおこる。今の老人たちは強い。いろんな事を知っている。この人たちは宝だ。これで、記憶を思い起こして年とったおばあさんが昔のものを作って若者に食べさせたら「おいしい」といい、それを聞いた業者が店をやる。

阪神大震災の時に鶏を持っていった人がいた。生きていれば悪くならないと思って持っていったが食べ方がわからない。私たち年寄りだったらわかる。

これは、活かさなければ宝にならない。この力をどうやって後に残すかを考えるのは若い人の力だ。そうしないとどんどん消えていってしまう。

行政の暗い感情

従来は、むらづくりはすべて行政主導。ところが今は、住民主体のむらづくりと言っている。しかし、これはなかなかうまくいっていない。行政の暗い感情は、地域の人が施策に乗ってくれないこと。例えば、大きな建物を造ってもその地域でちっとも機能しない。リンゴの博物館を造っても開かない。中身がないし、経営していくことにコストがかかる。そんなものがたくさんある。そこで地域の人に必要なものを造って地域の中でうまく回ってくれればそれほどいいことはない。行政側でも最近この達成感がわかるようになり、私の言っていることが行政に通用するようになった。

困っているのは日本の巨大な行政。百姓なんて昔から困っているから特に困っていると思っていない。食っていける。行政がやるとどうやって食っていけるかとか、そんなことを考えている。それではだめ。どうやって楽しく生きるか。そういうことになる。

都市と農村の交流からの学習

グリーンツーリズムやクラインガルデンなんて農村側から見れば不愉快でたまらない。高度経済成長のときにどんどん人が東京に出た。そうして東京は発展してきた。人々は農村に砂をかけて出てきた。しかし、それで都会では排気ガスと人の屁を吸って生きてきた。そしてまた、都会の人が再び農村に来るようになった。小銭を持って入ってきて腹が立つ。いっそ関所を造ってしまおうと思っている。しかし、そうも言えない。

30年ほど前の昭和45年、民宿が一番濃密な長野県の白馬村で、農協のお金で作られた民宿があるが、客がこないときどうするかを考えた。そんな時、京都に来ていた修学旅行で管理された都会の子どもたちを見て、農村の風土の中に入れようと、民宿に分散させて、そこに私の学生を入れてリーダーに仕立ててやろうと考えた。

それに目をつけた日本農業新聞が朝日新聞と一緒に受け入れをやった。親も一緒に来たから、マスコミも大勢来た。これは1億5000万くらいの広告に見合う価値があった。

しかしリーダーに学生を使ったのがネックだった。熱い若者たちなので「あれもやりたい、これもやりたい」ということでいろんなことをやると、サービスの充実により収入が少なくなり、とうとう新聞社とぶつかった。民宿のお母さんたちもがんばっていろいろ郷土料理を作ったが子どもたちに人気がなかった。この試みは早すぎた。なぜなら、農村や行政の暗い感情が、国に届くのに10年以上かかる。その頃には時代が変わってしまう。もっと国と農村が近づくようにしなければならない。そのために県があるが、その機能を果たしていない。

嫁不足による暗い感情

嫁の来てがなくて困っている。「誰かきてほしい人はいないのか」というと、いない。そんなやつはひざ抱えて黙っていればいい。しかし、行政は結婚相談所

を作ればいいという考えで作る。

長野県南部地方で青年グループの集まりに行った時、あるひとりの青年に、気になる相手がいるんだけれど誰にも彼女の名前を言わずにいた。そうすると思いが伝わらない。それが暗い感情になっていた。なのに、農家の嫁不足、という大きな問題にすりかえてしまっていた。そのことがわかって、一体相手はだれだということで、青年同士で話をしていたところ、知っている女性の名前を順番にいっていったらとうとう相手の名前が分かった。それから周囲の青年たちがもり立てて､彼女とその青年を結婚させてしまったという。後から聴いた話だが、嫁さんになった彼女に聞いた話でははじめはその青年のことをよく知らなかったが「友達がいい人なので悪い人ではないと思った」「こんな楽しい人たちと暮らせたらいい」と思って結婚したと言ったとのこと。

後継者不足による暗い感情

農家の後継者不足が暗い感情だと、じいさんが言った。ブドウを作っている農家の息子が東京農大の醸造学科に行ったが、後を継がず、大手の会社に入ってしまった。「解決は息子を騙して連れ戻すことだ」と言ったが、息子の方がいい暮らしをしているので引き戻せない。じいさんはブドウの規格外品でワインを50年作ってきた。「ワイン作りをやめてしまえばいい」と言っても「先生は自分が50年間やってきたのをやめる悲しみをわからないか」と言う。そこで、僕はワインの免許を預かった。ワインの免許は持っている限り作り続けなくてはいけない。作れなかったら、返さなければいけない。

しかし、本当は私がこんなことはしてはいけなかった。学校の先生と行政は口だけ出せばいい。きゅうり一本作ってはいけない。

農協に頼んだがだめ。いろんな人に頼んでもだめ。３年経った。親父は「おまえは評論家で口だけでいいんだ」そう言われて、自分が暗い感情になってしまった。その頃、安曇野で月に１回「死ぬまで学習会」というのがあり、そこでこの話をした。そして農協から金を借りて、安曇野ワイン工場を造った。そして農民の暗い感情をすべてワインにしてしまった。

農民の暗い感情であるりんごの値下がりがあった。値が下がって誰も取らなくなってしまったりんごを35円なら売れる、ということで全国から集めて、そこでワインを作った。しかしこれがまずい。暗い感情になってしまい、半年ほっといておいておいた。そうしたら少しおいしくなった。しかし、それを宣伝しても売れない。知り合いに頼んでもだめ。なぜか、と考えたら、自分は何食ってもうまいと思うからだということに気がついた。そうしたら、人に頼もうと思って料理の先生として有名である土井勝さんに頼んだ。飲んでもらったら「イヤーこれは、ワインとしたら、いまいちだけれど、のどごしがいいので女性には人気があるかもしれない」ということで売ってもらった。そうしたら売れた。そこで僕は自分がうまいって言ってはいけないことを学んだ。

梅が不作で困っていた時も安曇野でワインを作ってみた。作ったら酸っぱい。でも作ってしまった、どうしよう。そこで、いろんなことを試みた。現在はフルサイズで5000本作っている。

そんな風にしてたくさんワインを今まで40種類以上作ったが、たいていが失敗している。

今、全国の農民が困っているのがスイカ。4,000トン余っている。もちろんワインを作ったが、お勝手の生ゴミみたい。これを何とかしたい。スイカは肌の収斂作用があるので今、僕が考えているのは化粧水。

小川村での学習

ひとりの男がおやきを作り始めた。かつては役場の職員であった。その当時、この村をどうするかということで農業委員会の学習会に行って発奮して、いろんなことをやりたい、と言った。そうしたら先輩に「役場の職員なんだから適当にやれ。これを実行するのは俺たちなんだから」と言われた。そこで役場を辞めて会社で勉強をして、自分の家でおやきのレストランを開いた。地区のおばあさんを使った。しかし、場所が良くないので、売れない。25km 離れた県庁に持って行って食べさせた。「うまい」。それが噂になって誰かがレストランに行く。その噂がさらに広がってみんなが来るようになった。彼は各地区のおばあさんたちの家の近くで作れる場所を作った。60歳以上を採用する。

定年は75歳となっているが、一番はじめのおばあさんがいつまでたってもやっている。そこで定年をなくした。今では売上が９億近い。

1989年に行われたアメリカのロサンゼルスのジャパンエキスポに15人のばあさんが持っていって、青い目のお姉さんたちに売った。このおやきがアメリカでも人気がありそれ以来毎年15人ずつアメリカに連れて行くことを続けている。おばあさんたちは「私たちはアメリカに働きに行っている」と言って、元気になって帰ってくる。これは儲からないけれど、おばあさんたちがどんどん元気になるので続けている。

この小川村がきっかけとなって、今では300以上のおやきの店がある。おやき協会もある。僕はそこの顧問。調べていないけれど売上は30億以上あるのではないかと思う。

（公）地域づくり	活性化 七つの大切	（私）自分づくり
どういう地域にしたいのか一言で	（1）ＣＩの明確化 目標　独自性	自分はどういう自分でありたいか 自分は何をする人か、一言で
どんなグループがあるか？ あったか？　再点検	（2）学習のプロセス	自分が入っているグループ どんな仲間か？
どんなことをやっているか？ やってきたか？	（3）小さな実践の積み重ね	何をやっているのか？ 何をやってきたのか？
行政・農協にやってもらいたいことは何か？	（4）行政とのパートナーシップ	自分でやるべきことと思うことは何か？
リーダーはいますか？ リーダーになってもらいたい人は？	（5）よいリーダーシップ	自分がリーダーになるか？ リーダーを仕立てるか？ 現在のリーダーを支えているか？
中央集権、縦割行政の枠を越えられるか？ 従来通りか？	（6）行政・住民の自己変革	（＋）志向だったか？（－）志向だったか （－）を（＋）に変える訓練、経験
協力してもらえる人はいるか？ 個人の人脈のネットワーク化	（7）専門家の協力	自分の人脈（出来る人、頼める人）の再点検
地域のもつ（－）の財産	（－）の財産	自分の弱点
地域の持つ（＋）の財産	（＋）の財産	自分の長所

―風　土　舎―

自己変革の訓練

（図②）

役人は公で考えてしまう。まずは、自分の活性化を行わなければいけない。活性化７つの大切から

・ＣＩの明確化：自分は何をする人か一言でわからないとだめ。何で飯食っているかきちんと言えるようにする。一言でなんで食っているかわからないと百姓は信用しない。

・学習のプロセス：どんなものがあったか総洗いしてみる。人間は３人集まれば学習が始まる。

・小さな実践の積み重ね：自分は何をやってきたか。つまらないことを積み重ねてきた。

・地域のリーダーは保守的な人が多い。いいリーダーがいますか？　リーダーになってほしい人がいますか？　という問いかけ。

リーダーは今いい人でなくても、それは支えればいいリーダーになる。中国の古い言葉に「一人出家すれば、九族天にのぼる」というのがある。一歩前進したように見えるときはひとりのリーダーが100歩先に行っているとき。これがリアリズムだ。

・行政とのパートナーシップ：つい最近私が到達した。今まで、学習は体制批判。農家の人たちは悪口を言って一生を過ごしている。しかし、予算もすべて農協に払っている。
・建前（教育＝行政）があるから本音（学習）が生きている。建前だけで本音がなくてもだめ。
・専門家の協力：専門家として訓練をしてくれる人はいるか？　それは人脈。自分の人脈をもう一回確認してみる。

むとすノートの使い方

（図③　次ページ）

1982年に考えた。これは生涯学習ノート。「むとす」とは「んとす」で辞書にある最後の言葉である。
「～せんとす、～せむとす」という意味で、
More　active、more　creative　と考えられる。

毎日書くたびに自分の名前を書く。自分を変えようとしている「おまえは、やる気の玉井袈裟男」自分で言う。活性化と言うのは何もない状況から何かが加わって新しいものが生まれる。

例えば、酒は何もないところに酵母を入れると「ぶくぶく」とアルコールが出てくる。これが活性化。この時、酵母は活性剤となる。人間にとって活性剤の役割を果たすものは刺激。情報として私の目、耳、鼻から刺激が入ってきて変化がおこる。人間の刺激は五感から入ってくる。これに対して敏感に行動する。社会組織の中で不正が起こった時、黙っているのは、活性化していない組織。敏感に反応しなかったから日本の行政機構はおかしくなってしまった。

むとすノートを考えて、いざ書こうと思っても書けない。枕元においても書けない。書くことがない、と思っていたが、見ていなかった、聴いていなかったから書けなかった。ものごとの焦点が据えてなかった。書けずに自己嫌悪に陥った。皆さんが書こうと思っても書けないはず。そして自己嫌悪に陥るはず。

年とって自分史を書いても面白いのは自分だけ。むとすノートは自分史を書きながら生きているという感じ。これはぜひやってみてください、ってよく言っているが、100人聞いてこれをやるのは、ひとり。ここにいるみんなはやるかな？　やらないだろうな。

1983年12月10日のむとすノートから：

熟れた柿が食べる人もなく腐って落ちていく。これは、田舎に行けばどこにでも見られる光景だが、もったいないと思った。これを見て、むとすノートに何をやったかを書かなければいけないので安曇野ワインに電話をして「柿のワインができないだろうか」と聞いた。その時はそれだけ。その後、柿ワインが作られたが、うまいとは言えない。うまくないからほうっておいたら酢酸発酵し、柿酢ができた。これも土井勝先生に見てもらったらほめてくれた。現在は、柿酢は１億円以上を超えている、地場産品になっている。

柿は私の一生のテーマです。

昔あるおばあさんが、柿をジャムにしてどんどん煮詰めて豆に絡めたお菓子を作ったら品評会で一等になった。干し柿のうまさは皮をむいて干してちょっと皮にしわができている時。どんどん乾燥して粉をふいてしまったら、味が50点になってしまう。賞味期間が短いのが玉に傷。ところが、これはこの時期に冷凍庫に入れておくと味が保てるということを聞いた。これは急速冷凍をすればもっとうまいものができるのではないか。このようなことをずうっとやってきた。

爛熟した資本主義からの学習

今、私がしているこの腕時計。結婚式の引き出物のカタログでチョイスしたもの。他に欲しいものがないので仕方がないからこれを選んだ。ところがどこに行ってもみんなこの時計をしている。みんなも他に欲しい物がないから、この時計をもらったと言う。これはみな百姓が馬鹿だと思って、いらないものの中に時計を入れておいたら買いたくない時計を買わせるというシステムでしかないと思った。「日本の爛熟した資本主義！」こういった暗い感情はオーバーに考えなければならない。

女房に「何か欲しいものがないか」と聞いたら「お米券がほしい。はがきを出したらお米を送ってくれるようなものがほしい」という。そのことをむとすノー

ムトス・私は…□□□□□　　年　月　日

MUTOSU - I am _____ date _____

(I'll make myself more positive, active and creative)

君は何を What did you 見たか see? 聞いたか hear? 嗅いだか smell? 味わったか taste? 触れたか touch? 何を思ったか And how do you feel about it?			
そして何をやったか？ What did you do for it?			
やって何を学んだか？ What did you learn from it?			
索引 Index	人 person	場所 place	対象 object

トに書いて風土舎で多くの人にファックスを送った。

そうしたら、岐阜県中津川市で、風土舎をやっている石の博物館を経営しているところが、地ビールを売りたいと思って、地ビールはがきを作った。はがきに書かれたメッセージは『これは酵母は抜いていません。清涼感はないけれど、酵母が生きています。だから酒屋さんに置くことができません。私はこれをあなたに差し上げたい。だからほしいとき、このはがきを出してください』とした。

これをお葬式の香典返しにしようとしている。作った人ともらう人の間にある。これは情報。これを作るにあたって郵政省で聞いたら禁止規定がないので、大

丈夫だった。財務局に聞いたら、事例がないので大丈夫だった。偽造されては困るので、バーコードを作った。現在特許申請中。

ところで中津川の人はMr.ヤル気のような人。やろうとすると、人がわっと集まってくる。

ある時、「この石の博物館で無料で結婚式をやったらどうだ、入場券も無料券を与えればみんなも喜ぶ。その時は収入がないかもしれないけれど、人間は15年回帰説があるそうだからそうしたら、15年後、家族を連れてくるはず。その時儲ければいい」と提案したら、早速、公募をして30組集まった。さらにそこで、会場の他に貸衣装の紹介、レストラン、宝石、そんなことで結局儲かっている。

このはがき券の話をいろんな講演会でしていたら、早速偽造されてしまった。米のはがきがでてきた。ここに信州りんごもあった。これはいいアイディア。これを香典返しに使ってもらったら、500出た。

「よおーし、見ていろ。これで爛熟した資本主義をやっつけてやる」これが僕のハートです。

孤独な暗い感情

農民の一番の悲しみは孤独な労働。女ってのは１日に２時間以上しゃべらないと病気になってしまう。そこで兵庫県の城崎郡日高町での話。みんなパートに出てしまって、女性５人だけ地域に残ってしまった。その中のひとり、中西礼子さん。何もやることがないので、そこで料理店をやろう、ということになった。資本もないのであるものでやろう、ということで山菜の料理店をやったらヒットした。最初に６畳の店舗を構えた。みんな自分たちの身の回りのものを使ってやっているから、支出がない。くもの巣を這って待っていると言う感じ。そんな風にしていると、ぽつんと人がきて、そこから広がってきた。彼女は人の話を聞くのは上手なんですね。ぜひ皆さんも行ってみてください。

風土舎とは

僕は風の人。常に動く。
百姓をやっている人は土の人。動かない。
風は土に向かって吹く。
お月様に土がないのは風が吹かないから。
風と土はお互い仲が悪い。
風と土の交流によって生まれたのが風土舎。

風土舎とは、情報を必要と思われるところにファックスを送る。国やマスコミ、研究者、学生などが上手くネットワークしている里地ネットワークは何をやっているかはわからないけれど、風土舎とくっつけると大きくなると思うよ。

私は農民の出身で農学の大学を出て、土だと思っていたが、やはり風であった。土に向かって吹くことしかできないと51歳のときに気がついた。その頃から一切教授会に行かなくなった。ここはヤル気のない人がいろいろ述べているだけ。僕に20人友達がいて、それぞれ何ができるかわかっていて、頼めば何をやってくれるかがわかっている。その20人の友達にも20人のそう言う友達がいたら、400人にまで広がっていく。そうすればだいたい１、２で何でもできてしまう。

例えば、総理大臣に直接言おうと思っても無理。しかし、知り合いの知り合いが総理大臣との知り合いである。それがわかれば、直接は無理だが、言うことはできる。

自分でできることはうんと小さいと思っているんですよ。だからネットワークは大事。ヒューマンネットワークは人肌なので、広がっていく。僕は人を騙かすのが上手だと言われている。単位を出した学生は２万。彼らもみんな騙してきた。僕が学生に騙されたのかもしれない。騙すコツは「こっちもいいけれど、あっちもいい」ということを作らなければいけない。

風土舎というグループは、得に何もならない。会長もいないし、僕が言い出したきり。各地方でやっている人が名乗っているだけ。僕のところは風の風土舎。何もないけれど、みんなの隠れ家としてぜひきてください。寝るところがあるから。酒もありますよ。

三重ふるさと学研修が
地元学の手法でスタート

三重県内には69の市町村があります。三重県では、この市町村職員を対象とする研修について、自治会館組合が担当しています。自治会館組合では、昨年度、地元学の提唱者であり実践者である吉本哲郎さん（水俣市役所職員、熊本大学非常勤講師）を講師として招いて「三重ふるさと学」研修を行いました。また、その後、５市町村から15人が参加して地元学の実践地水俣市を訪ね、地元学体験研修を行いました。本年はこの３段階目のステップとして、地元学の手法から、自分たちの住んでいる地域をしっかり見つめていこうという「三重ふるさと学」のプログラムが動き始めています。里地ネットワークでは、この研修をサポートしています。

三重県では、職員になった直後の１次研修を皮切りに、３年目以降の２次研修、６年目以降の３次研修が行われ、新任課長に対しては、リーダー研修が行われています。もちろんこれとは別に、知識や技法の研修も数多く実施されていますが、３次研修とリーダー研修に関しては「三重ふるさと学」をテーマとして、地元学の手法を学ぶ研修が取り入れられています。

自分たちの住んでいる地域は自分たちの足で歩いて、写真を取って、詳しい人に聞いて調べていくこと。調べた人しかわからないということ、だから地元の人が調べなければならないということ。地域の風土や文化、暮らし方、遊び方、昔の家の建て方、水の使い方などを調べることから地域を見つめ直すと、物質と経済の視点で見つめてきたこととは異なるたくさんの宝物が見えてくるはずです。これからの豊かさの尺度は、こうした暮らしや生活文化を見つめ直すことの中に見え隠れしているように思えます。

この研修は５月下旬にはじまり、これまでに３回実施しました。

第１回目は、津市に近い河芸町三行地区で、水田と里山と昔は城があった100世帯ほどが集中している集落を歩きました。

第２回目は、山村留学が行われ、99%の人工林がある林業と、木の加工、石の山村文化の集落である、三重県中央部飯南町山村で実施しました。

第３回目は、遠洋、近海、栽培、養殖と日本の漁業の縮図のような尾鷲市の漁村で実施しました。

市町村職員約50人、地元参加者（案内人と食の案内人）20名、事務局15人の体制で、集落に泊まり込んでのフィールドワークと人と文化と食の交流会を重ねています。研修生は、三重流ふるさと学の手法を学びます。地元の人は、地元を案内しながら、地元のことを生活文化の視点で捉え直していきます。

資源カードや地元の地図がみるみるうちにできあがり、「水のゆくえ」と「あるもの探し」で見つかったさまざまな地元の資源が確認されていきます。びっくりしたこと、感動したこと、出会えた喜び、交流の喜び、という種が、きっと、いつかはどこかの集落から新しい動きとして芽生えはじめればいいと期待しています。

この研修は本年の秋まで、あと７回実施します。

今回会員（会費既納入者）の方に同封させていただいたテキストは、若干異なるところがありますが、内容は三重県の研修で利用している研修テキストと同じものです。（Ａ４サイズ、一部カラー72頁版）

あなたの地域でも実践してみませんか。

（事務局・竹田純一）

テキスト追加購入の希望がありましたら、添付の申し込み書でどうぞ。1500円です。

左：地元案内の人に昔の様子や地名由来を聞く。地元の人も初耳。
中：あるもの探しで見つけたモノにテーマや由来を書き込む。分からなければ地元の人に聞く。
右：３日間の成果を地図にまとめる。全員の思いがこもる、地元の人へのプレゼントになる。

９月の里地セミナー案内

９月の里地セミナーは、都心を離れ、古都・鎌倉に飛び出します。
里地を見つめるとき、「子ども」の視点がとても大切なものだということに気づかされます。
今回は、子どもと里地について、おふたりの方から鎌倉での実践についてお話を聞きます。

９月10日（金）10：00〜13：00

里山の自然の中での土の子育てと谷戸の保全活動

鎌倉市 山崎の谷戸を愛する会代表、
青空保育なかよし会　相川明子
（鎌倉市山崎の谷戸にて）

鎌倉には多くの里山が残されています。しかし、幼児やこどもたちが豊かな里山の自然の中で遊んでいる姿はあまり目にしません。大人の暮らし方をまねている子どもたちは、ゲームやテレビに夢中になっています。７歳までは神の子、三つ子の魂おやまでも……ではないですが、子どもは本来、自然の中で体一杯で遊ぶはず。小川で遊び、山滑りをし、野の草でおままごとをしたり、虫をとって魚を捕まえて、裸でかけまわって…。

今回の里地セミナーは、１歳時から３歳時までの幼児の子育てを里山の中で行う「青空保育なかよし会」の活動、そして、４歳から６歳のちびっこ自然探検隊、小学生のこども自然探検隊、さらに鎌倉市と共同で行う谷戸塾の活動、里山を守る10年余の活動を、山崎の谷戸を訪ねて行います。当日は源氏蛍、平家蛍の舞う山崎の谷戸を散策します。山歩きができる格好でおこしください。

申し込みは、ＦＡＸでお願いします。
詳細な資料は後日返送します。
参加費は各セミナーとも
会員500円、一般1,000円、
ボランティア無料となっています。

９月10日（金）14：00〜17：00

心を育む総合学習・付属鎌倉小学校での実践

横浜国立大学教授
付属鎌倉小学校元校長 小池敏夫

鎌倉にはもうひとつ総合学習の先駆的な取り組みを行う小学校があります。「心の育ちを願う総合学習」を実践している付属鎌倉小学校の試みです。付属鎌倉小学校では、主体性、自主性を育むさまざまな試みが行われています。生徒の自主運営による運動会、文化祭、音楽会。１年生と２年生の兄弟制度、３年生の周辺探検、４年生の市内のグループ学習、５年生のグループ研究、クラブ活動の創設と呼びかけ、そして、何よりも学級ごとに何をやりたいのか、どんな１年をつくるのかを全員の気持ちが一致するまで話し合いで行われています。来週の予定は学級での話し合いをして決めます。だから、空白の予定表が来ることがしばしばあります。1カ月に１度のお弁当の日には、ふだん学校にいたのでは学習できないことを、グループの話し合いで決定したら行動予定表を先生にチェックしてもらい、グループごとに外の社会を見に行きます。農家、畳屋さん、おまわりさん、海岸、水族館、植物園、米軍基地、電車製造工場……。好奇心がグループでの自主計画を立ててグループの責任で行動します。

先生が生徒へ知識を教える教育とは根本的に異なり、先生が児童のリーダーとなって児童同士による相互学習が行われています。

１日鎌倉へ来てみませんか。学習、共育、人づくりの技法が見えてくると思います。

会場は、鎌倉駅前中央公民館を予定しています。

イベント・募集案内

グスコーブドリの大学校

岩手県東山町は、宮沢賢治が最後の仕事にいのちを賭けて取り組んだ石灰工場のある町です。「グスコーブドリの伝記」は宮沢賢治がこの町で工場技師を行っていた頃の作品で、彼のこうあって欲しいと願った社会が描かれています。

東山町は文化財登録をされた旧東北採石工場周辺の整備を行い、「太陽と風の家」が本年４月からオープンしています。ここで、宮沢賢治の思いを胸に、東北・岩手発の新しい環境教育の試みとして、グスコーブドリの大学校が開校されます。

日時：８月20日（金）～22（日）日
場所：岩手県東山町
　　石と賢治のミュージアム「太陽と風の家」
内容：
20日～開校式・基調講演「農民芸術概論と銀河系意識」（斎藤文一・新潟大学名誉教授）・ミニコンサート（バイオリン演奏＆朗読・寺崎巌）・懇親会
21日～工場見学・分科会（野外体験：「賢治作品と鳥の世界をあるく」「賢治作品と石の世界をあるく」「賢治作品を野外で演じてみる」）・夜の星空ハイク
22日～ふり返りセクション
宿泊：国民宿舎平泉荘
募集人数：50名
参加費：大人16,000円・学生15,000円
　　（宿泊費・食費・保険料含む）
募集締め切り：８月10日（月）必着
申し込み先：①住所②氏名③性別④年齢⑤電話（Fax）連絡先⑥希望する分科会⑦参加動機、を明記の上、はがきまたはFaxで以下に送付してください。
「グスコーブドリの大学校」事務局
〒029-0309　岩手県磐井郡東山町松川字浦ノ沢149-1
石と賢治のミュージアム「太陽と風の家」気付
Tel：0191-47-3655　Fax：0191-47-3944

メビウスの卵展

メビウスの卵展は1991年から東京で始まり全国大都市で開催されてきた、科学者、美術家などによる観客参加型展示物のサイエンス＆アートをテーマとした子どもも大人も楽しめる参加体験型の不思議な科学展です。今回の東山展では、宮沢賢治ゆかりの石灰鉱山の町ということで、「芸術と科学のはじまりとしての鉱物体験」をテーマに、他のどこにもないユニークな企画を実現します。

日時：８月１日（日）～31日（火）
場所：石と賢治のミュージアム「太陽と風の家」
　　（期間中は無休）
問い合せ先：0191-47-3655

第５回森林と市民を結ぶ全国の集い

四国の真ん中、人口628人の小さな村、早明浦ダムにかつての村の中心が水没した村、高知県土佐郡大川村で５回目の集いが開催されることになりました。これまで森林と市民の関わりについて、様々な事例を通して語り合ってきました。今回はそれらを踏まえて、「みんなで支える森林づくり」において、これから何を目指していけばいいのか、と言う視点で考えていきます。

日時：８月19日（木）～22日（日）
場所：高知県土佐郡大川村自然王国白滝の里
内容：
19日～水源の森からのメッセージ（吉野川源流の里・大川村の過去・現在、下刈作業のインフォメーション）
20日～水源の森づくり（下刈作業）・開会式・パネルディスカッション「森林ボランティアを市民社会にどう位置づけるか」（パネラー：菊池修・松山フィランソロピーネットワーク、井上善夫・山口県林政課、山本麗子・宝塚 NPO センター、コーディネーター・松下芳樹・どんぐりネットワーク）

21日～分科会・交流会
22日～分科会・全体会・閉会式
※分科会内容：
①水源の森を保全するためになにができるか
②生き物たちの森を保全するためになにができるか
③経済の森を再生するためになにができるか
④交流の森をとおしてなにができるか⑤森林ボランティアをこれからどうしていくか
参加費：一般3,000円・学生2,000円
（宿泊費、食費、交流会費は別途）
問い合せ先：
第５回森林と市民を結ぶ全国の集い事務局
坂本耕平（（社）高知県森と緑の会）
Tel：0887-52-0072　Fax：0887-52-4177

新潟館Ｎ’ＥＳＰＡＣＥでのイベント

・７月23日（金）～８月10日（火）
「森で遊ぼう！～木となかよくなる夏休み～」
遊び、作り、植えて「木」と仲良くなり、「森」を学ぶ、夏休みの子供向けイベント。
・７月23日（金）～８月10日（火）
「未来の雪国」絵画コンクール
小学生以下の子供たちから募集した「未来の雪国」の絵画展
・８月21日（土）～26日（木）
通った、撮った「松之山」矢澤晴夫写真展
神奈川県在住の矢澤晴夫さんが、松山町に魅せられ15年間通い続けて撮った写真を展示する。
・８月27日（金）～29日（日）
越後バッカス街道
ワイン、地ビール、地酒の３つを味わえる地域を広域観光ルートとして紹介する。試飲あり。
問い合せ先：表参道・新潟館ネスパス
Tel：03-5771-7711　FAX：03-5771-7712
E-mail：nespace@newniigata.or.jp

※表参道・新潟館Ｎ’ESPACEは、渋谷区神宮前（表参道）にある新潟県のアンテナショップです。

Ｎ’ESPACEというのは、新潟・ネットワーク・にいがたニュースの「Ｎ」と、フランス語で空間・スペースを意味する「ESPACE」を組み合わせたものです。

東京には数多くの地方自治体のアンテナショップがあり、その殆どでは特産品の常設販売を通じて地域の魅力をアピールしています。その中でネスパスは地元特産品の常設展示をあえて行わず、新潟の魅力を広く伝えるため、当館のスペースを活用した自主イベントを企画・運営しています。また、県内の自治体・個人等が行う貸し付けイベントにも力を入れています。このように新潟館ネスパスは、人と人とのネットワークづくりの場となることを目指し、新潟と首都圏を結ぶアンテナ的役割を果たしています。

一階と地下一階の「アピールスペース」では、様々な「しかけ」で新潟の文化・産業・自然などの中から「新潟の新鮮さ」と「うるおいのある暮らしのヒント」を提案するためにテーマを絞り込んで紹介しています。

二階の「にいがた情報ライブラリー」は、県内各地の観光パンフレット、市町村広報紙のほか、インターネット端末も設置しており、新潟情報の図書館的役割を果たしています。また、新潟県内の観光案内、観光相談も行っています。

同じく二階の「にいがたＵターン情報センター」は、新潟へのＵターンＩターンを希望している人に求人情報や生活情報を提供し、就職相談も行っています。ここには、ハローワークに登録された求人情報をリアルタイムで検索できるシステムがあり、今までのような書面のやりとりによるタイムラグがなくなってきています。希望にあった求人があれば、センター職員に申し出て、面接の手続きをとることも可能です。

そのほかに新潟県産品の市場拡大や物産展の企画調整などを行うセクションや、新潟との交流企画の紹介や定住促進を行うセクションもあり、首都圏での新潟のＰＲを行っています。

また、一階の和食レストラン「静香庵」では、魚沼産有機栽培コシヒカリや日本海でとれた魚などを使った新潟の味を楽しむことができます。
表参道・新潟館ネスパスホームページ：
http://www.newniigata.or.jp/